

# 東奈良遺跡発掘調査概要

茨木市教育委員会

## はしがき

私たちの郷土茨木には、恵まれた自然条件を背景として、人々が生活を営んだ様子をうかがうことのできる埋蔵文化財が数多く発見されています。これらの文化財によって、現在に生きる私たちも先人達の知恵をうかがい知ることができます。

茨木は今、北大阪地域の中核都市として、豊かな自然の中に調和のとれた住環境の整備をめざしていますが、先人達が築いた文化を継承し、その上に現在から明日にかけての新しい文化を形成していくことを目指しています。このような時、茨木の祖先が残した文化財に対する理解を深めることは、まさに意義の深いことがあります。

こうした意味からも、郷土の文化財を保護し、未来に継承していくことは、私たちの使命であり重大な責務であると考え、今般本書を刊行することにいたしました。

本書の刊行にあたり、調査関係者をはじめ多くのかたがたから、ご指導とご援助を賜りましたことに厚くお礼を申し上げますとともに、今後の文化財保護行政の推進に、より一層の努力を傾注いたしますことを表明して、ごあいさつといたします。

茨木市教育委員会

教育長 中 平 敏

## 例　　言

1. 本書は、昭和61・62年度に大阪府北部特定事業建設事務所の依頼により行った大阪モノレール事業に伴う発掘調査概要である。
2. 発掘調査は、茨木市教育委員会事務局文化財調査員宮脇薰(嘱託)を担当者として実施した。
3. 発掘調査にあたっては、大阪府北部特定事業建設事務所、不動建設・浅沼組共同企業体及び大木組・国誉建設共同企業体の各位にご協力を得た。
4. 調査の実施と概要作成にあたっては、宮脇薰・桑原紀子・國分佐知子・田中良子・森木芳子が従事した。
5. 本文の執筆は、宮脇薰が担当した。

## 目 次

はしがき

例 言

第1章	調査に至る経過	1
第2章	遺跡の位置と環境	2
第3章	調査の結果	3
	第1次調査	3
	第2次調査	4
まとめ		8

## 図 版

調査地域	図版 I
周辺の遺跡	図版 II
調査区の位置図	図版 III
遺構図（第1次調査）	図版 IV～VII
遺構図（第2次調査）	図版 IX～XII
遺 構（第1次調査）	図版 XIII～XVI
遺 構（第2次調査）	図版 XVIII～XXV



## 第1章 調査に至る経過

大阪都市圏の鉄道網は、周辺地域から大阪市への一点集中型の都市構造をうけ、放射状に形成されている。大阪の周辺地域において人口が増加し、周辺都市間の鉄道は大阪市の都市部を迂回するか、自動車交通に頼らなければならず、大阪市及び周辺地域に交通混雑を引き起こし、さまざまな弊害が生まれている。

このようなことから、交通混雑を解消し、周辺地域間の交通需要に対応するとともに、都市機能を周辺地域に分散していく基盤として環状鉄軌道の必要性が高まり、大阪国際空港を起点とし、阪急南茨木駅を終点とするモノレール計画がなされた。

本事業地は、茨木市東奈良遺跡内にあたるため、茨木市教育委員会と大阪府北部特定事業建設事務所とで協議を行った。その結果、埋蔵文化財に支障が生じる天王一丁目の駅舎部分及び市道大王一丁目～宇野辺一丁目線以東の支柱部分の発掘調査について協議が整い、発掘調査依頼書が茨木市教育委員会あて提出された。それを受け茨木市教育委員会が調査を実施した。

本調査は、昭和61年11月から翌年の1月にかけて駅舎部分の調査を実施し、続いて、昭和62年6月から同年の7月にかけてモノレールの支柱部分の調査を実施した。

調査による出土遺物等は、昭和62年7月から翌年の3月にかけて茨木市立文化財資料館において整理作業を行った。

## 第2章 遺跡の位置と環境

茨木市は、大阪府北部淀川右岸に位置し、東は高槻市、南は摂津市、西は吹田市・箕面市・豊能町、北は京都府亀岡市に接している。市域は、南北17.3km、東西8.6kmの南北に長い長方形を成している。市域の北半分は、丹波高原の一部である北摂山地で豊かな自然を残している。南半分は、大阪平野北端の三島平野に属している。このようなことから茨木市は、ほぼ北高南低の地形である。市域を北摂山地を源とする佐保川、勝尾寺川、安威川が南流し、市の中央部西河原で合流し、市の南部を大正川が流れている。

交通路としては、JR西日本東海道線、阪急京都線が平行して南部を東西に横断している。また、市の中央部を国道171号線、名神高速道路が走り、近畿自動車道、大阪中央環状線が市の南端をかすめている。

東奈良遺跡は、近畿自動車道・大阪中央環状線と阪急京都線が交差する南茨木駅付近に所在する。現在の奈良町・天王・沢良宜西・東奈良にあたり、茨木市南端の元茨木川と大正川に挟まれた沖積地に位置している。

東奈良遺跡は、昭和46年に発見された弥生時代から鎌倉時代の複合遺跡である。現在までの調査では、弥生時代・古墳時代の竪穴式住居跡、平安時代の掘立柱建物跡が発掘されている。また、弥生時代の方形周溝墓、弥生時代前期の環濠の一部と考えられる溝や弥生時代・古墳時代前期の溝も數多く発見されている。特に昭和47年から48年にかけての調査では、銅鐸の鉄型の完成品と6種類の破片、銅戈の鉄型、ガラス勾玉の鉄型及びそれらを製作するに使用されたと考えられるフィゴなどが出土している。

遺跡の西側には、南北に連なる千里丘陵が望まれ、北側には、北摂山地の山麓から張り出した洪積台地の南端部分に弥生時代から古墳時代にかけての集落跡の中条小学校遺跡が隣接している。また、三河川の下流域には駅前遺跡をはじめ、上中条遺跡、溝呬遺跡、牟礼遺跡、日垣遺跡など数多くのかかりわざと考えられる遺跡が広く分布している。

## 第3章 調査の結果

### I 第1次調査（駅舎部分）

調査は、東西に幅2m、長さ80mのトレンチをA区として、南北に幅2m、長さ8mのトレンチを4本設けて行い、それぞれ西から(イ)・(ロ)・(ハ)・(ニ)区としてE状に調査区を設定して行った。

(ニ)区より東においては、既設の上・下水道及びガス管等により、すでに地山と考えられる層も削られており、遺構の確認は出来なかった。

調査区の基本層位は、盛土(1.5~1.8m)、耕土(0.2~0.3m)、床土(0.15~0.25m)、無遺物層である黄青灰色土層(0.2~0.4m)、茶褐色土層(0.25~0.35m)、そして遺構面である青灰色土層が広がっている。包含層は茶褐色土層であり、弥生式土器及び古墳時代の土師器・須恵器が含まれている。

検出した遺構は、溝2条と柱穴である。

#### 溝-I

溝-Iは、(ロ)調査区において検出された。西北から南東に(A)区を斜断するようなかたちで検出された。幅が8.2m、深さが1.2~1.3mの規模の大きい溝である。(ロ)区の北で他の溝である東西に流路の岸の一部と考えられるものをも検出された。その溝の一部は、溝-Iによって削りとられて不明である。

溝-I内より古墳時代初頭の土師器の壺・甕・高杯が出上している。

時期としては、古墳時代初頭の溝であると考えられる。

#### 溝-II

溝-IIは、(ハ)調査区においてほぼ東西に横断するようなかたちで検出された。調査区の関係で規模は不明であるが、幅は5m以上、深さは1.2mの規模である。他の調査において検出することが出来なかつたので、調査区の北に流路をもつものと考えられる。

## 柱穴

柱穴は、径20~30cm、深さ10~15cmであり、出土遺物がないので、時期は特定出来ない。

その他(A)調査区の東端部分において、東へ落ち込んで行く遺構が検出されたが一部の検出であり、また出土遺物もないで、性格・規模・時期については不明である。

## II 第2次調査(橋脚部分)

調査は、橋脚ごとに西から(1),(2),(3),(4),(5),(6),(7),(8),(9),(10),(11)調査区を設定して行った。

基本層位は、盛土(0.8~1.5m)、耕土(0.2~0.3m)、床土(0.1~0.3m)調査区1~7区は、茶褐色土層(0.2~0.3m)、遺構面である黄色土層が広がっている。調査区8~10区においては、床土の下層に無遺物層である黄青灰色土層(0.2~0.3m)、茶褐色土層(0.2~0.3m)、そして遺構面である青灰色土層が広がっている。遺構面は、西端の(1)調査区と東端の(10)調査区では、約1.2mの高低がみられる。

包含層は、茶褐色土層であり、弥生式土器及び古墳時代の須恵器・土師器が含まれている。

### (1)調査区

径が3mの円形の調査区である。

検出された遺構は、柱穴が4ヶである。規模は大きいもので径35cm、小さいもので10~15cm、深さはいずれも15cm前後である。出土遺物がないので、時期は不明である。

### (2)調査区

辺が6mの正方形の調査区である。しかし、北側2mの部分については水管等の埋設により遺構面が削りとられていた。

検出された遺構は、溝2条、不定形土壙1基と柱穴が8ヶである。

溝-1は、調査区の西南端部において検出された。規模は幅が85cm、深さが

25cmである。出土遺物がなく、時期は不明である。

溝-Iは、調査区の南半分において東西に横断するように検出され、西において途切れ、西部において溝-IIによって切られている。幅が55cm、深さが5~6cmである。出土遺物がなく、時期は不明である。

不定形土壙は、現幅が広いところで3.2mで、西においていくらか屈曲しながら先を突きだしたような土壙である。深さは8~10cmの浅いものである。出土遺物がなく、時期は不明である。

柱穴は、径が7cm~25cmの円形のものと、長径が65cm、短径が40cmの長楕円形のものがある。深さはいずれも15cm前後である。これも出土遺物がなく、時期は不明である。

### (3)調査区

一辺が6mの調査区で、中央部は水道管の埋設により、幅2m分について、遺構面が削りとられている。

検出された遺構は、溝2条と柱穴が4ヶである。

溝-Iは、調査区の南半分を東南から西北にかけて検出された。西北部は、水道管埋設工事により削りとられて幅がせまくなった状態で検出された。幅が1m、深さが35cmである。出土遺物として弥生式土器片が出土したので、弥生時代の溝であると考えられる。

溝-IIは、調査区の北半分を東北から西南にかけて検出された。幅が1.4m、深さが45cmである。出土遺物として弥生式土器片が出土したので、弥生時代の溝であると考えられる。

柱穴は、径20~40cmの円形のものであり、深さは15cm前後である。出土遺物がなく、時期は不明である。

### (4)調査区

一辺6mの調査区を設定して行ったが、地山面が削りとられており、遺構を検出することが出来なかった。

### (5)調査区

一辺6mの調査区を設定して行ったが、(4)調査区と同様に地山面が削りと

られており、遺構を検出することは出来なかった。

#### (6)調査区

一辺が6mの調査区を設定して行ったが、全体の $\frac{3}{4}$ の部分にわたって遺構面が削りとられており、遺構面が残っていたのは南部分 $\frac{1}{4}$ のみであった。

検出された遺構は、柱穴が2ヶである。柱穴は、径15~25cmで深さが10cmである。出土遺物がないので、時期は不明である。

#### (7)調査区

一辺が8mの調査区を設定して行ったが、調査区の西南角より北に2mの地点と東南角を結ぶ線の南部分は、地山が削りとられており、遺構を検出することが出来なかった。

調査区のその他の部分で検出された遺構は、方形周溝墓が1基である。

方形周溝墓は、溝内で現5m以上、溝は幅が80cm、深さ45cmの規模である。溝内より弥生時代中期の壺及び高杯破片が出土していることから弥生時代中期の方形周溝墓である。内部主体部については検出することが出来なかった。

#### (8)調査区

短辺7m、長辺14mの調査区を設定して行った。

遺構としては、方形周溝墓3基、溝が1条、土壙1基が検出された。

方形周溝墓Iは、溝内で長辺7m、短辺5.7mの長方形の方形周溝墓である。西の周溝は幅90cm、深さ40cm、南の周溝は方形周溝墓IIの北の周溝と共有するようなかたちで検出された。幅が2.2m、深さ45cm、東の周溝は方形周溝墓IIIの周溝を共有している。南及び東の周溝から弥生時代中期の壺・高杯及び甕の破片が出土しているところから弥生時代中期の方形周溝墓である。

方形周溝墓IIは、現一辺が4m以上の方形周溝墓である。

方形周溝墓IIIは、現一辺が1.3m以上の方形周溝墓である。

溝は、調査区の西南部において検出された。幅が現1.5m以上、深さが現55cmの二段になった溝である。溝内より弥生時代中期の壺及び甕片が出土したことから弥生時代中期の溝である。

土壙は、長辺2.2m、短辺が1.3m、80cmの方形の土壙である。深さは15cmで

ある。出土遺物はなく、時期も不明であるが、方形周溝墓Ⅰ内であることから、  
これの主体部とも考えられる。

#### (9)調査区

一辺8m、一辺が10mの調査区を設定して行った。調査区の中央部を東西に  
はしる幅3.5m、深さ65cmの溝が一条検出されたのみである。出土遺物として、  
弥生時代後期の壺・甕の破片が出上したことから弥生時代後期の溝である。

#### (10)調査区

一辺が8mの調査区を設けて行ったが、地山面が削りとられており、遺構を  
検出することが出来なかった。

#### (11)調査区

一辺が6mの調査区を設けて行った。

溝1条が検出されたのみである。

溝は調査区の南北にわたっており、西側の岸が検出されたのみであるが、  
現幅3m以上、深さが1.5mの規模である。出土遺物がないので、時期は不明  
である。

## ま　と　め

今回の調査は、東奈良遺跡の南地域について遺跡の西端から東へ約360mにわたり実施することになった。

この調査区域は、全体的にみると、第2次調査の(9),(10)調査区の間に、北西から張り出してきた洪積台地の先端部分に当たり、さらに(10)調査区より東には沖積地が広がっている様相を示している。

また洪積台地の先端の遺跡の利用状況については、(6),(7)調査区で検出されたように、方形周溝墓がつくられ、弥生時代中期の墓域を形づくっている。

洪積台地の部分においていくつかの柱穴を検出したが、いずれの調査区においても建物としてとらえることが出来ないぐらい、まばらな状態で検出し、時期も不明であるが、集落の一部をなしていたことは推定できる。

第2次調査(9)調査区からは弥生時代後期の溝、第1次調査調査部からは古墳時代初頭の溝が検出されたことで、第2次調査(9)調査区以東の沖積部分で弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて、人々が生活していたという新たな痕跡をみとめることが出来る。

今後、既知の調査結果を含め、思考を進めていく上で新しい資料の出土がまたれるものである。

# 図 版



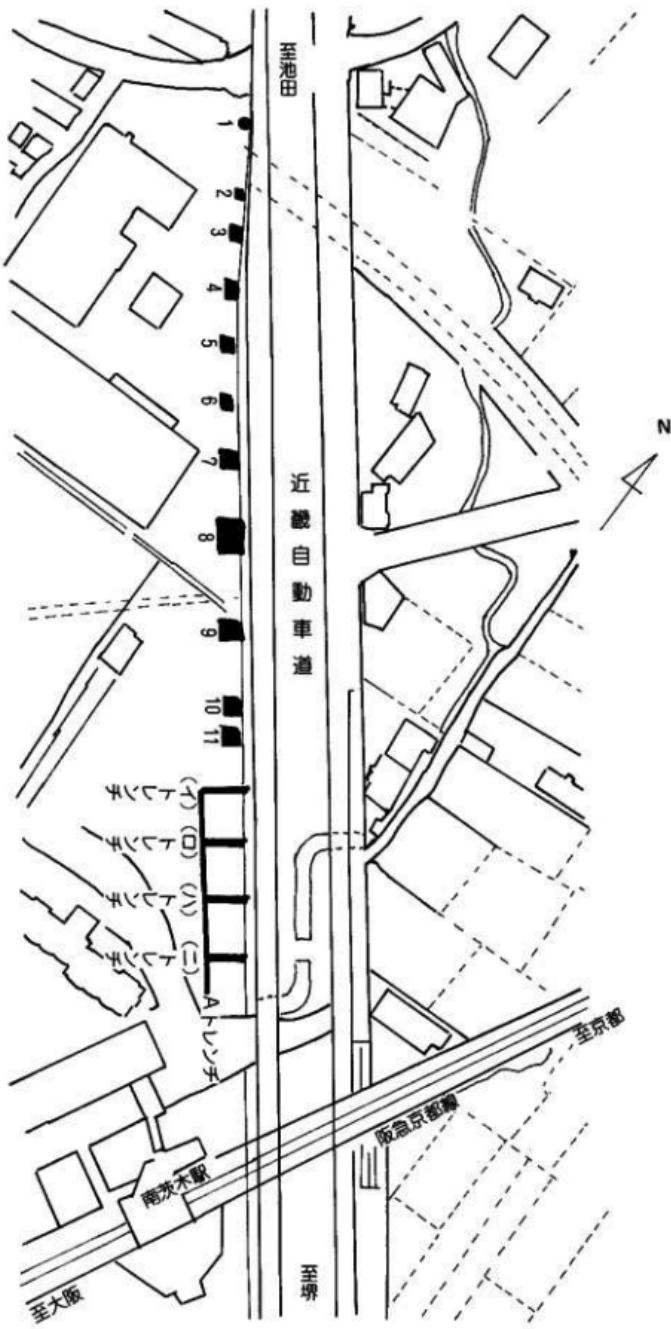
図版一 調査地域



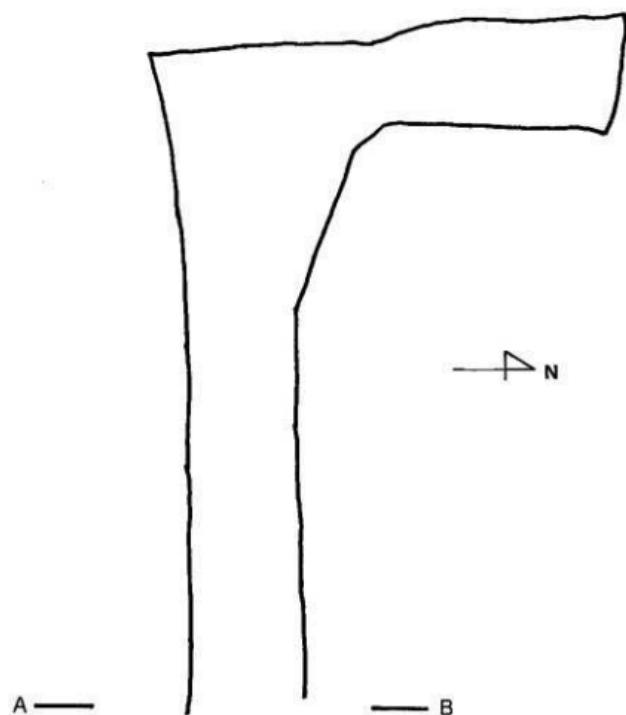
図版 II 周辺の遺跡



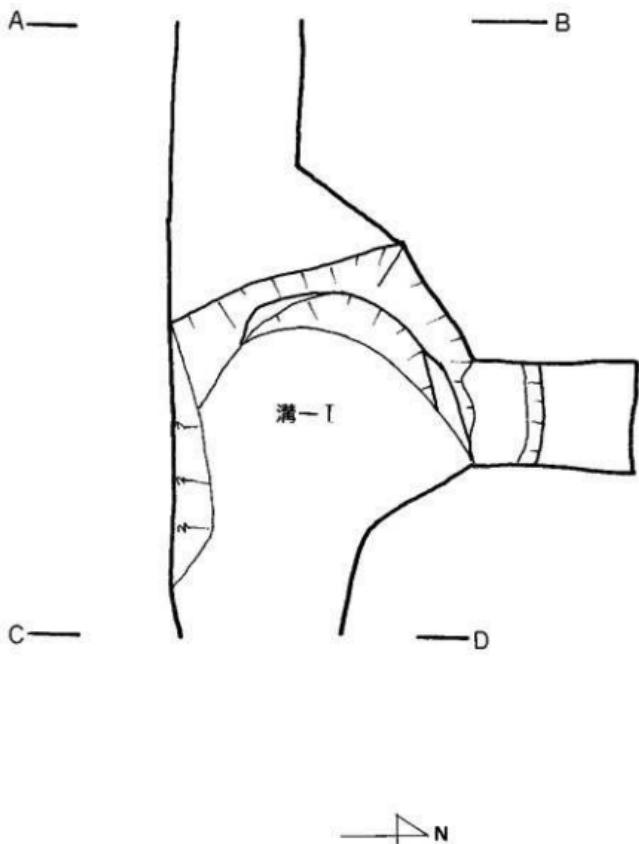
図版三 調査区の位置図



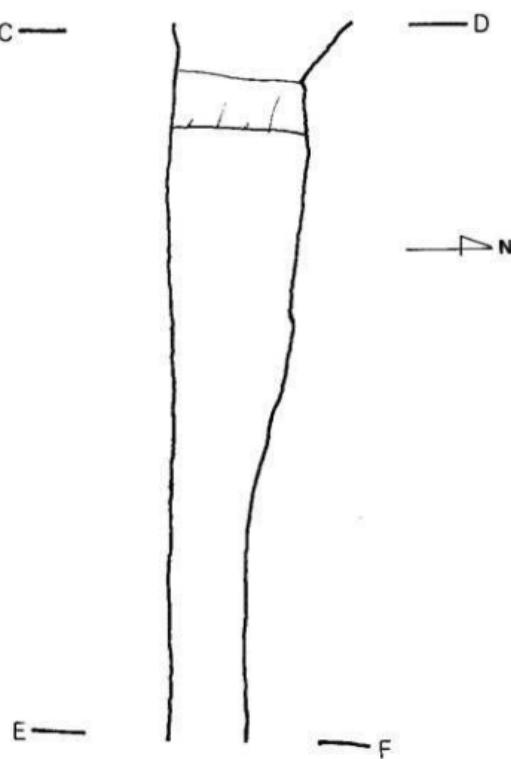
図版 IV 造構図(第一次調査) その1



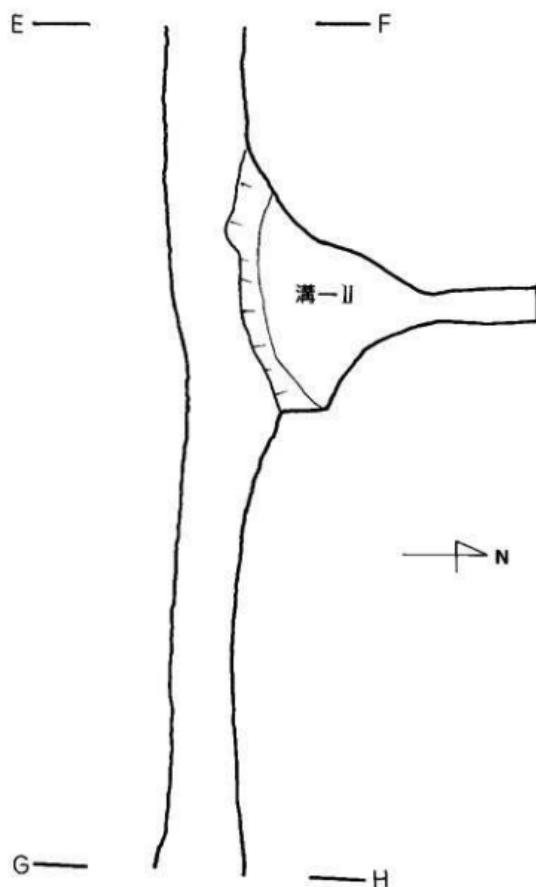
$\gamma_{100}$



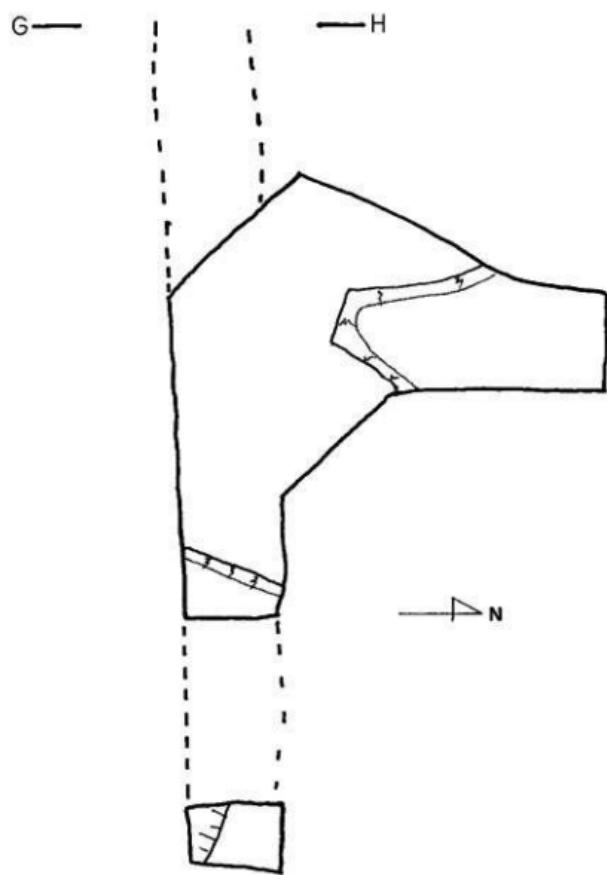
図版 VI 遺構図（第一次調査）その3



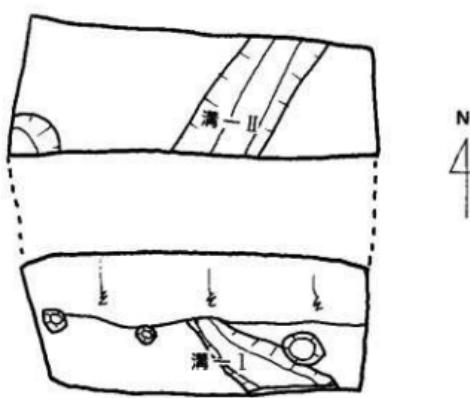
$\gamma_{100}$



$\gamma_{100}$

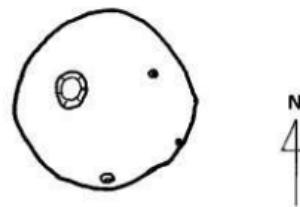


図版 IX 遺構図(第2次調査)



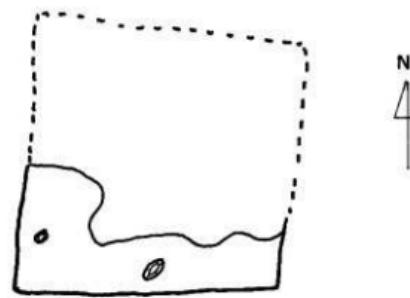
(3) 調査区

$\lambda_{100}$



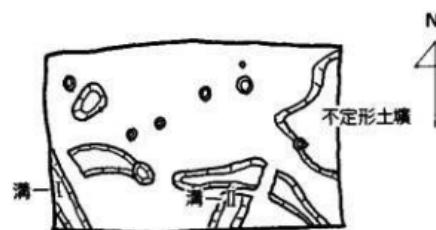
(1) 調査区

$\lambda_{100}$



(6) 調査区

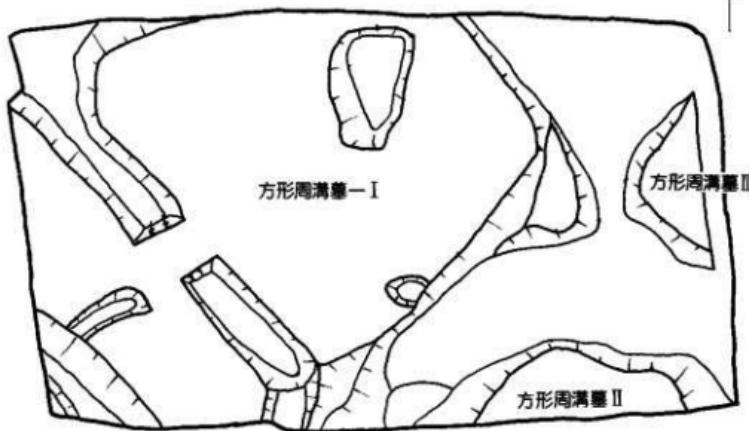
$\lambda_{100}$



(2) 調査区

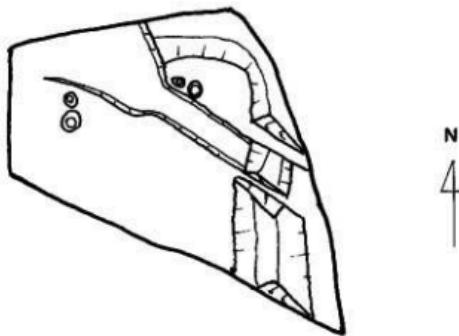
$\lambda_{100}$

図版 XI 造構図（第2次調査）



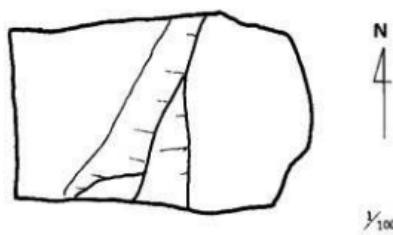
(8) 調査区

$\lambda_{100}$

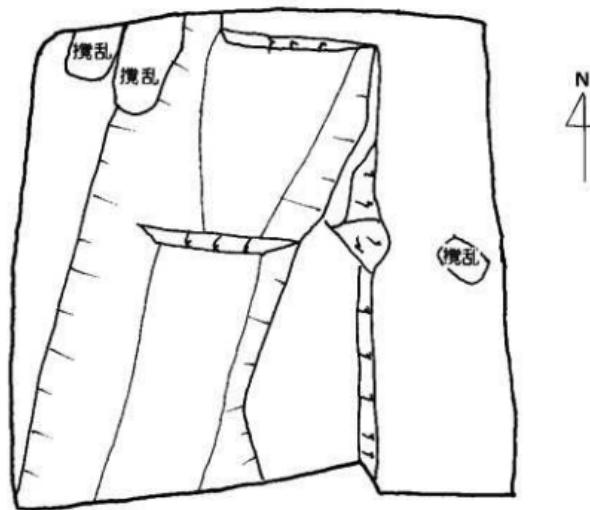


(7) 調査区

$\lambda_{100}$



(11) 調査区



(9) 調査区

$Y_{100}$

図版 XIII 遺構（第1次調査）



(A)トレンチ



(イ) トレンチ



(口) トレンチ



(A) トレンチ

図版 XV 遺構（第1次調査）





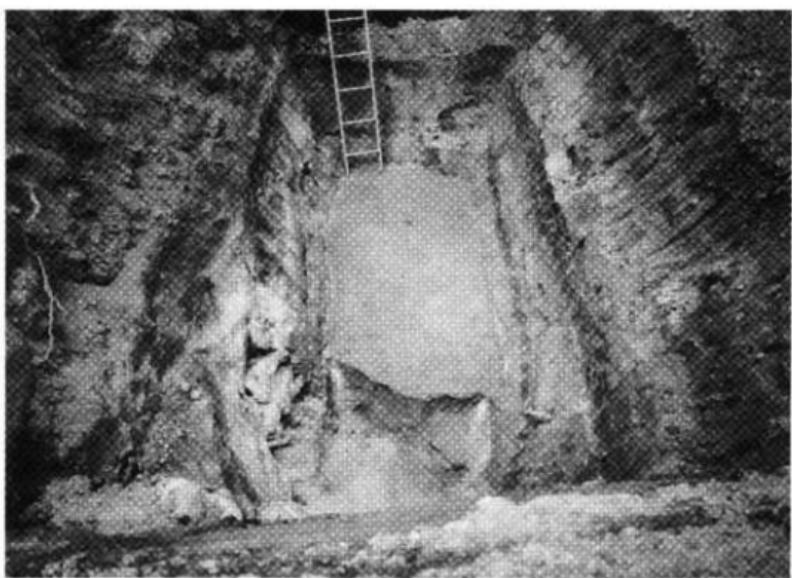
(ハ) トレンチ



(ハ) トレンチ



(二) トレンチ



(二) トレンチ



(2) 調査区（東から）



(2) 調査区（南から）



(3) 調査区一北（東から）



(3) 調査区一南（東から）

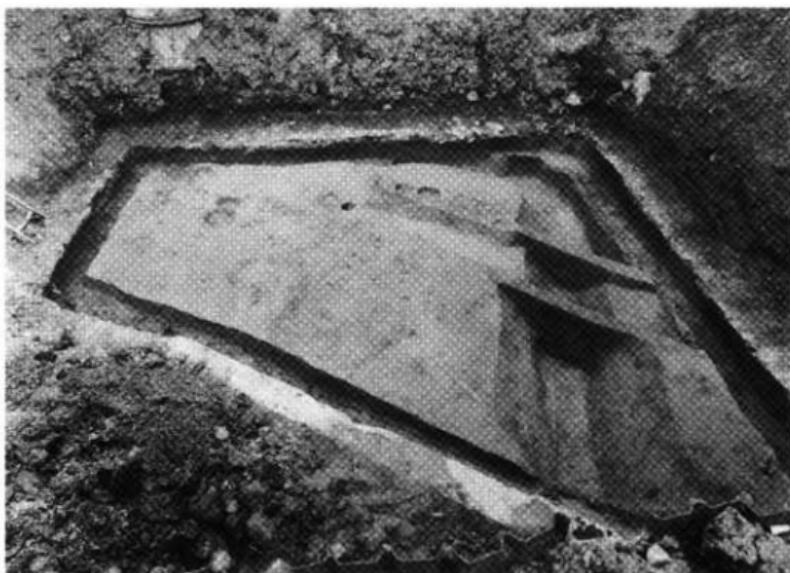
図版 XX 遺構（第2次調査）



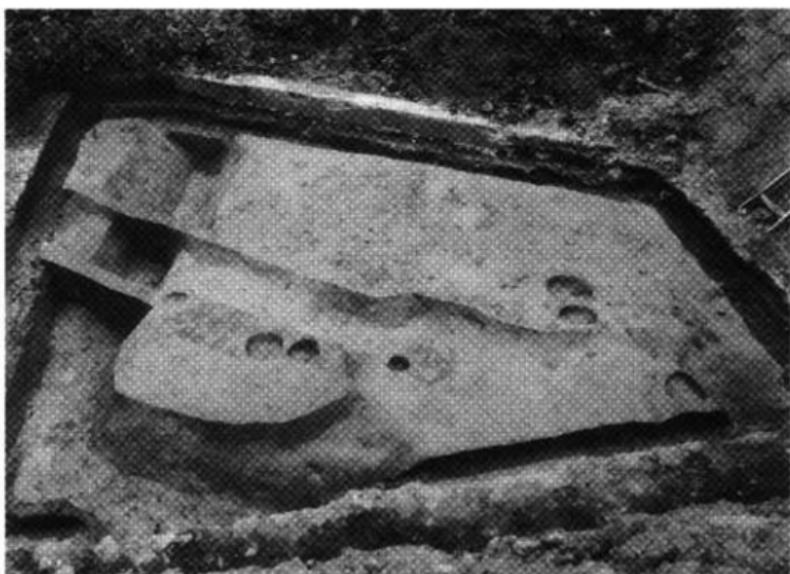
(6) 調査区（北から）



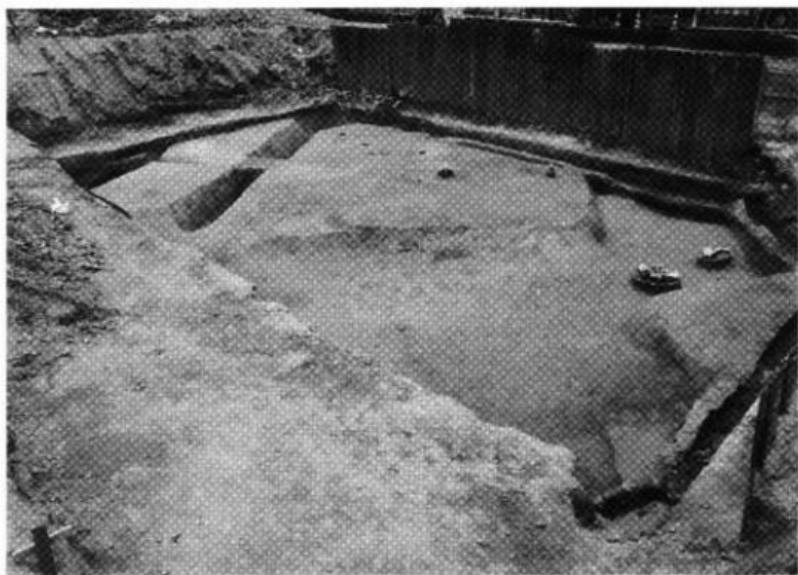
(6) 調査区（東から）



(7) 調査区（南から）



(7) 調査区（北から）



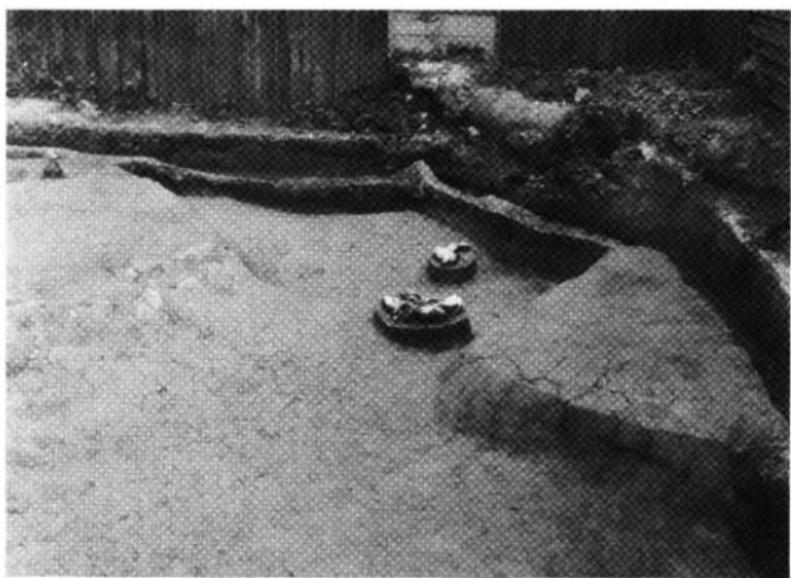
(8) 調査区（南東から）



(8) 調査区（西から）



(8) 調査区（供献土器出土状態）



(8) 調査区（供献土器出土状態）



(9) 調査区（西から）



(9) 調査区（東から）



(11) 調査区（南から）



(11) 調査区（西から）

## **東奈良遺跡発掘調査概要**

発行日 昭和63年3月31日

発行 淡木市教育委員会

印刷 (有)コトブキ印刷